

The feature-positive effect in allocations of responsibility for collaborative tasks

Savitsky, K., Adelman, R. M., & Kruger, J. (2012). *Journal of Experimental Social Psychology*, 48(3), 791–793.

Abstract

- 「文章を長くする修正」に比べて「文章を短くする修正」は他者からの評価がされにくい
- 共著で文章を作成する文脈においてライター群とエディター群に分かれ、ライターが作成した文章を「長く」または「短く」と教示されたエディターが加筆修正を行い、エディターの仕事ぶりをライターとエディター自身が評価を行った
 - ✓ 「長く」と教示された条件では、ライターによる評価とエディターの自己評価に差は見られなかった
 - ✓ 一方、「短く」と教示された条件では、ライターによる評価はエディターの自己評価より有意に低かった

Introduction

「一見近い職業に見えるが、絵画修復士と画家は対極にある。もし成功しても、他の芸術家の名声を高め、彼が誰であるか、何を成し遂げたかを世に知らしめることなく消え去るのだ」—Grann (2010), p. 55

- 人々は共同作業において、自己の貢献の大きさを、他者が評価するよりも大きく考えがちである (Brawley, 1984, Burger and Rodman, 1983, Christensen et al., 1983, Deutsch et al., 1993, Kruger and Gilovich, 1999, Kruger and Savitsky, 2009, Ross and Sicol, 1979, Savitsky et al., 2005, Thompson and Kelly, 1981)
 - ✓ 夫婦ともに家事負担の大きさを主張する、複数の共同研究者が第一著者の地位を主張する
- これは、共同作業における自分の貢献が他者の貢献よりも見つけ出しやすい[easier to spot and recall] ためである (Ross and Sicol, 1979, Schwarz et al., 1991, Tversky and Kahneman, 1973)

- 冒頭の絵画修復士のような「汚れを取り除き元の状態に戻す」仕事は、完璧な仕事をするほどその痕跡が分からなくなるため、その仕事ぶりが理解されず、過小評価される可能性がある
 - ✓ 絵画修復士、窓ふき職人、ゴミ清掃業者、文章校正
- これらの仕事は、「削除(deletion)による貢献」(⇔ 追加(addition)による貢献)として分類できる
- 「特徴肯定性効果(the feature-positive effect(原文の表現)/FPE/邦訳;服部,2016*)/非対称的混同効果(asymmetric confusability effects(より近い表現?)/ACE/邦訳;内野,2002*)」によると、人は刺激の変化について、削除の変化のほうが追加の変化よりも見落としやすいと言われている(Agostinelli et al., 1986, Hearst, 1991, Maki, 1989, Newman et al., 1980, Sainsbury, 1971)
 - ✓ (補足)Agostinelli et al.(1986)によると、車などのオブジェクトを線画で表現した実験刺激を記憶させ、後に要素を追加させる変化させた刺激や、要素を削除する変化をさせた刺激を表示し、変化の検出や識別をさせたところ、検出も識別も追加させる変化のほうがよい成績であった
 - ✓ (補足)Maki(1989)によると、文章の追加削除においても、同様の成績が得られたという
 - ✓ (補足)Newman et al.(1980)によると、特徴があるものを識別することは容易だが、特徴がないものを識別することは難しいことを示した
- 「削除による貢献」をする場合、その行為による変化が見落とされてしまうことで、貢献自体が見落とされてしまう可能性がある(Savitsky, Gilovich, Berger, & Medvec, 2003)
 - ✓ (補足)Savitsky et al.(2003)によると、グループの所属に関して、他者がグループから外れる場合よりも自己がグループから外れることの影響を大きく判断することを示した
- つまり Strunk and White (1959) は文章校正において、「不要な言葉は省け」という言葉を残しているが、ライターの記事を短く校正したエディターは過小評価される可能性がある
- 本研究では、このことを実験的に証明する

Method

Participants

- 86名のウィリアムズ大学の学生が「ライター群」または「エディター群」として参加した
- 「エディター群」の参加者のうち半分は「追加条件」、半分は「削除条件」に割り振られた
- ライター群の参加者とエディター群の参加者は1対1対応で実験に参加した(43組)

Procedure

- 実験は以下の手順で行われた
 - ① ライター群が、ウィリアムズ大学の重大な問題について学長にあてた手紙の草案を作成する
 - ② エディター群が、ライター群の参加者が書いた草案を改善するように要求される
 - ✓ 追加条件の参加者は、「手紙を長くし、その要点を詳しく説明する」よう教示された
 - ✓ 削除条件の参加者は、「手紙を短くし、その内容を少ない言葉で伝える」よう教示された
 - ③ 作成した改善案について、エディター群の参加者自身が以下4つのアンケートに回答する
 - ④ 改善案がライター群に返却され、エディター群の参加者と同じアンケートに回答する

Measure

- 参加者に対して使用したアンケートは以下の4つである
- Editor improve letter(7件法 / 1, unsuccessful ~ 7, very successful)
 - ✓ 「エディターは手紙の草案の修正に成功している」
- Editor change letter(10件法 / 1, not at all ~ 10, a great deal)
 - ✓ 「エディターは元の草案を大きく変更した」
- Salience of editor's voice(10件法 / 1, primarily writer ~ 10, primarily editor)
 - ✓ 「最終的な手紙では誰の『声』が良く聞こえるか」
- Availability of editor's contribution(7件法/1, hard to think of examples~7, easy to bring examples to mind)
 - ✓ 「エディターが行った修正の例を容易に思い浮かべることができる」

Results

Manipulation check

- エディターが教示に従わなかった 3 組の参加者を除外し、エディター群が追加条件の 20 組と、エディター群が削除条件の 20 組のデータを分析に用いた
- 各条件の文字数について、追加条件($M = 352.3$ to $M = 509.6$ words)は有意に長く、削除条件($M = 386.8$ to $M = 307.5$ words)は有意に短くなった ($t(19) > 3.96$, $ps < .001^{***}$)

Assessments of editors' contribution

- 実験群と実験条件ごとのアンケート評価の基礎統計量は Table 1 のようになった

Table 1
Editors' and writers' ratings in the addition vs. deletion conditions.

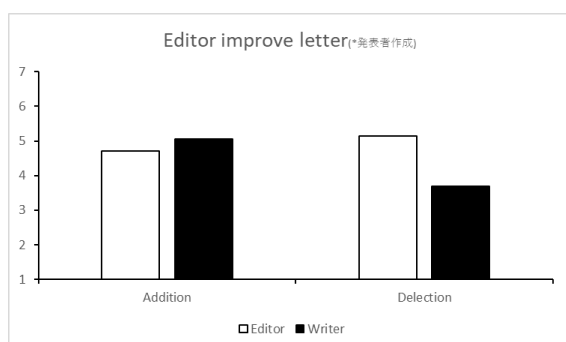
Measure	Condition	
	Addition (n = 20)	Deletion (n = 20)
Editor improve letter ^a		
Editor	4.70	5.15
Writer	5.05	3.70
Editor change letter ^b		
Editor	6.35	6.80
Writer	6.30	4.80
Salience of editor's voice ^b		
Editor	4.95	4.95
Writer	4.35	3.10
Availability of editor's contributions ^a		
Editor	4.90	5.05
Writer	4.60	3.16

^a Scores on these measures could vary from 1 to 7.

^b Scores on these measures could vary from 1 to 10.

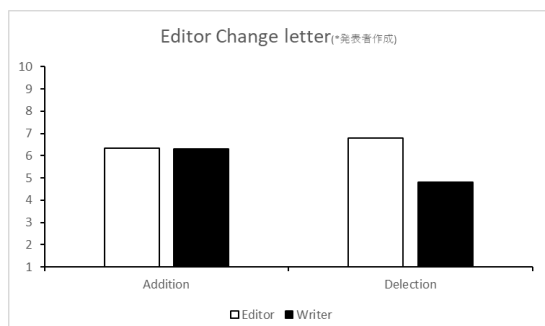
Editor improve letter

- 有意な交互作用が見られた($F(1,37) = 4.25$, $p < .05^*$)
 - ✓ 削除条件では、ライターからの評価(Writer)はエディターの自己評価(Editor)よりも有意に低かった($t(19) = 3.10$, $p < .01^{**}$)
 - ✓ 追加条件では有意差は見られなかった($t(19) < 1$)



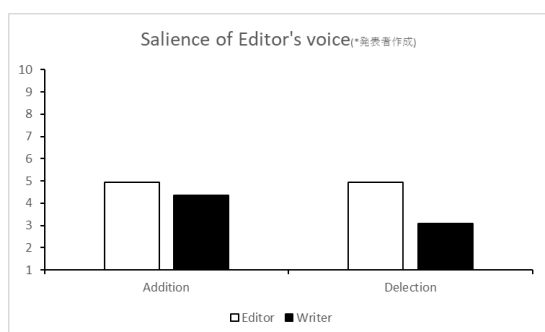
Editor change letter

- 有意な交互作用が見られた($F(1, 37) = 6.55, p < .02^*$)
 - ✓ 削除条件では、Writer は Editor よりも有意に低かった($t(19) = 3.82, p < .01^{**}$)
 - ✓ 追加条件では有意差は見られなかった($t(19) < 1$)



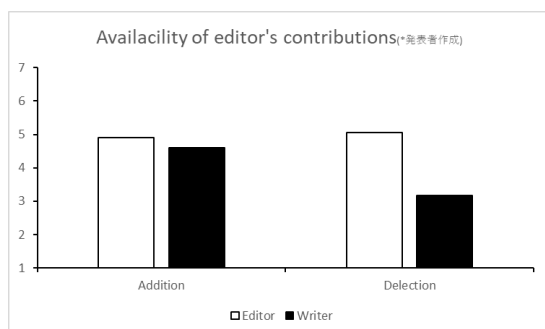
Salience of editor's voice

- 交互作用の傾向が見られた($F(1, 37) = 3.63, p < .10^†$)
 - ✓ 削除条件では、Writer は Editor よりも有意に低かった($t(19) = 3.63, p < .01^{**}$)
 - ✓ 追加条件では有意差は見られなかった($t(19) = 1.05, ns$)



Availability of editor's contribution

- 交互作用の傾向が見られた($F(1, 37) = 4.74, p < .05^*$)
 - ✓ 削除条件では、Writer は Editor よりも有意に低かった($t(19) = 3.66, p < .01^{**}$)
 - ✓ 追加条件では有意差は見られなかった($t(19) < 1$)



(Sobel test)

- 媒介効果を調べるために、Sobel test(Judd, Kenny, and McClelland, 2001)を実施した
- Availability of editor's contribution の評定値が、実験群と実験条件の違いと Editor improve letter の評定値の違いを媒介していた($Z = 2.17, p < .05$) (パス係数やこれ以外の媒介分析の結果など不明)

Discussion

- 「文章を長くする修正」に比べて「文章を短くする修正」は他者からの評価がされにくいことが明らかに結果であった
- これは、「削除による貢献」が痕跡を残さない行為であるためである可能性がある
 - ✓ 計画・分析・処理といった表に出にくい貢献は、他者から評価がされにくい(Gilovich et al., 1999, Kruger and Gilovich, 2004)
 - ✓ テロ攻撃の阻止、経済的大災害の回避、地球温暖化の抑制など
 - ✓ 「災難を回避するための努力は、ポケットにしまわれてしまう」(Alter, 2009)
- それ自体が非行為 (inactions)による貢献も他者の目からは評価されにくいかもしれない
 - ✓ 会議中に逆効果になるような発言を控える
- そこで、追加で以下のような調査を行った
- 参加者 149 名に対し、4~7 名のグループディスカッションにおける、自分自身の評価と他者に対する評価を、行為と非行為の側面から評価させた
 - ✓ 行為：役に立つ提案をする、新しいアイデアを出すなど
 - ✓ 非行為：気を散らす発言を控える、他の人に発言の機会を与えるなど
- 参加者は他者の行為と自分の行為を同等に評価した一方、他者の非行為を自分の非行為よりも低く評価した ($F(1, 27) = 16.79, p < .001^{***}$)
- 本研究は、共同作業における自分の貢献を過大評価する一方で、それを再現できない実験が多く存在することに示唆を与える可能性がある(see Kruger & Savitsky, 2009)
- 「削除による貢献」や「非行為による貢献」は、「追加による貢献」や「行為による貢献」に比べて信頼性が低く、自他の評価の違いを明らかにする一端を担う可能性がある
- 「削除による貢献」や「非行為による貢献」を他者に評価してもらえるようにする方法は、皮肉でもあるが以下のような選択肢が考えられる
 - ✓ わざと不完全な仕事をし、自分の削除による貢献を際立たせる
 - ☆ たった 1 つのゴミが「ポイ捨て禁止」の規範を完璧に汚れない空間よりも顕著にする (Cialdini, Reno, & Kallgren, 1990)
 - ✓ 貢献がそれ自体で目立つようなものにする
 - ☆ ワードプロソフトの変更履歴機能を用い、修正箇所を取り消し線で示す
- このような戦略を考えるべきであるほど、自分の貢献が、自分の心の中にとどまるもの、現状維持のもの、行動しないもの、何かを取り去るものなどは痕跡をほとんど残さず、期待通りの評価を受けられない可能性がある